

補説 学術活動と映像マスメディア

著者	梅棹 忠夫, 栗田 靖之, 飯田 卓
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	31
号	2
ページ	286-300
発行年	2007-02-02
URL	http://doi.org/10.15021/00003967

補説 学術活動と映像マスメディア

梅棹忠夫／栗田靖之
 (聞き手・構成 飯田卓)

Appendix: Academia and Visual Mass Media, an Interview with Tadao Umesao and Yasuyuki Kurita

以下の対談録は、サントリー文化財団から受けた助成研究「海外ドキュメンタリー番組制作における産学連携の研究——異文化理解リテラシーの向上に向けて」（代表者：飯田卓）の活動の一環として企画されたものである。1950年代から60年代にかけて、研究者を中心に組織された海外エクスペディションは、映像マスメディアの協力を得てきた。このことについて当時の事情を回顧的にうかがうことと、マスメディア関係者と研究者が協力していくうえでの課題を明らかにすることが、この対談の目的であった。

本来なら研究論文として再構成するべきであろうが、今回にかぎっては、対談録のまま収録し、飯田論文の補説とするほうが適当と判断した。これは、飯田論文をふまえて考察を今後深めていくうえで、この対談録がまさしく資料的価値をもつことによる。この対談録のもっとも重要な点は、人類学的エクスペディションを率いてマスメディアと深く関係してきた梅棹自身が、マスメディア（とくに映像マスメディア）に対してアンビバレントな感情をもっていたことであろう。

すでに飯田論文で指摘したとおり、梅棹は、エクスペディション時代の幕開け（カラコラム・ヒンズークシ学術探検）以来、マスメディアとの連携をたもってきた。また、映画産業が斜陽を迎えてエクスペディションの経営構造が変わり、多くの研究者がマスメディアとの表立ったつながりを断ってから、彼はテレビというあたらしいメディアにつき合おうとした（アフリカ学術調査）。テレビ産業への期待は、『情報の文明学』（梅棹1988）という著書からもうかがえる。こうしたマスメディア産業への接近にもかかわらず、梅棹は1960年代に放送メディアへの出演を公然と拒絶するようになり、現在もその姿勢を崩していない。

映像マスメディアに対する梅棹の態度の変化は、自伝のなかでも綴られている（梅

棹 1992)。それを読めば、一部映像作家の背徳行為が梅棹の態度を変えさせたように思えるが、問題はそう単純なものではなからう。映像というメディアは、研究という営為にとっては武器にも凶器にもなりうる。このことは、程度の差はあれ活字メディアについてもいえるのだが、学術的知見を選択し蓄積する制度が、映像メディアではいまだにじゅうぶんに整備されていない。つまり、メディアそのものの可能性と、それを活用する制度の未熟さが、あたらしいメディアに対する評価の矛盾を生んでいるのである。

対談録の後半で語られているのは、まさしくこのことである。このことは、梅棹自身もこれまでに論じなかった点であり、対談録の意義はきわめて大きい。また、この点は、京大学士山岳会や民博で梅棹の後輩だった栗田が対話相手となり、はじめて明らかになったもので、論文として再構成すると論理がそこなわれるおそれがある。このため、あえて対談録のまま収録するべきだと判断した。

対談は、2004年1月13日に、国立民族学博物館内でおこなわれた。オーディオ・テープの記録を文字起こした後、発言者がそれぞれに整理し、飯田が解題と脚注を加えた。脚注は、『梅棹忠夫著作集』で確認できないものを中心に付した。

戦前の探検映画

栗田 先生と映像記録の関わりについて時代をおってお聞きしたいと思います。先生は1941年にボナベ島調査をされていますね。あのときには、映画班は連れていかなかったのですか？

梅棹 連れていっていないね。

栗田 映画の機材も持っていかれなかったのですか。

梅棹 ない。映像はぜんぜん撮っていないはずですよ。短い16ミリならあるかもしれないが、私はいっさいタッチしていない。

— 写真は先生がご所蔵ですか。

梅棹 いや、私はそのときに写真を撮っていない。だれかほかの人が撮っているものはあったな。

栗田 私が子どものときに見た探検の記録映画に、マナスル遠征のときのものがあります。1953年、今西壽雄さんや榎有恒さんらが行かれたときです。マナスル以前に、そのような試みはほかにありましたか。

梅棹 マナスルの登頂はもっとあとです。

— 最初の遠征のとき¹⁾に、登頂はできなかったけれども映画だけは作ったようで

す。『白き神々の座』という…

梅棹 毎日新聞の人が行って撮ってきた映画です。

栗田 それ以前、先生は大興安嶺の映画で、探検について大いに刺激を受けられたそうですね。

梅棹 それは1934年の白頭山です。冬の白頭山の、非常に鮮烈な映画がありました。私は大きな刺激を受けた。朝日新聞社が撮っていたね。そのときに、朝日新聞社の記者だった藤木九三さんが同行していた。藤木高嶺さんのお父さんです。古い話や（笑い）。私も藤木九三さんには面識があった。うちまで行ったことがある。

栗田 映画をご覧になったのは、先生が中学生のころですね。

梅棹 京都一中の3年やったかな。

栗田 それで、梅棹先生はこの世界に惹きつけられた。映像の申し子みたいなものですね。このフィルムはもうないのでしょうか。

梅棹 それをAACK（京都大学学士山岳会）の平井一正君がかなり探した。ところがついに出てこなかった。

栗田 そうですか。

— そのころの映画撮影は、仕事ではなかったのですか。

梅棹 隊員は映画の仕事はしていません。藤木九三さんは朝日新聞社の敏腕記者で、それで京大の白頭山の遠征隊に特派記者としてついて行って、映画を撮ってきたのです。

— このころ映画を撮るといのは、めずらしかったのでしょうかね。

梅棹 しかし、映画技術そのものは確立していた。費用がかかるので、いくらでも撮るといわけにはいかなかったが、ビッグイベントなら映画に記録されてもおかしくない。

— 白頭山の映画は、新聞社主催の上映会みたいところで上映されたのでしょうか。

梅棹 それが一般に上映されたということは聞いたことがない。京都一中の先輩が4人、隊に入っていたから、4人が凱旋して中学校で報告会をした。そのときに、撮ってきた映画を見せてもらったんです。

栗田 今西錦司さんと西堀栄三郎さんと…

梅棹 奥貞雄さん。それから京都府立医大から来たお医者さん…

栗田 谷博さん。あの人は、京都の京北町にいらっしゃいましたね。

梅棹 そう，タニコウや。京北町に隠棲しよった。

栗田 京北町の肉屋を育てて，おいしい肉が京北町で食えるのは谷先生のおかげだと，聞いたことがあります。

梅棹 いまだにタニコウというあだ名は伝説的に残っている。あの人は，京都一中から三高，京大の線をたどらずに府立医大に行った。奥貞雄さんは，京都一中から三高だったと思う。

きっちりした記録映画を撮ったのは，そのときが最初ではないかな。これは非常に鮮烈やったな。しかしたぶん，そういうビッグイベントの映画を撮るという例は，すでにあっただと思う。

中学で白頭山の映画を見たあと，三高に入ってから，今度は自分が白頭山に行っています（1940年）。高校最後の年には，樺太に行っています（1940-41年）。

栗田 今西壽雄さんとですね。

梅棹 それから大学に行って，ポナベ島（1941年）と大興安嶺（1942年）ですが，撮った映画はありません。

栗田 平井さんがだいぶ探索したけれども，結局，大興安嶺もポナベも映画が出てこなかったのですね。

梅棹 ポナベは，植物の16ミリ映画があったみたいやったが，記憶がはっきりしない。

栗田 大興安嶺のとき，当時としては珍しく無線まで使っていながら，やはり映画というところまではなかなかいかなかったのですね。

梅棹 いかないな。しかも，その少し前から，フィルムが逼迫しているのです。ものがない。

私がモンゴルに行ったとき（1944-46年）には，普通のスチール写真でさえも不自由でした。カメラを持っていたけれども，フィルムが手に入らないので，ほとんど写真を撮っていない。戦後，進駐軍が天津に上陸してきたとき，私の写真機材を，藤枝晃さんが「わしが売ってきたる」と言ってくれた。国産品やったけれど，そこそこの値段で売ってこられた。

栗田 あの大先生は語学が達者だったから，商売も…

梅棹 達者でした。藤枝さんという人は，ほんとうにおもしろい。じつに達者なもので，アメリカ軍人を相手にとうとうとやって，機材を売ってしまった。あの人は，中国人に対しても，相手がびっくりするぐらいに言葉がうまい。

栗田 20 ほど言葉が話されたというのは本当ですか。

梅棹 できたかもしれない。

栗田 飯田さんは知らないだろうけれども、藤枝氏は、この国立民族学博物館の館銘石を揮毫しておられる先生です。大先生でした。

梅棹 大先生は天才だったし、京大きっての美男子だった。

栗田 民博が創設されたころ、風邪ひいたときに、送られてきた『国立民族学博物館研究報告』を読んだと言って、色々コメントをいただきました。「この研究者は、まだようわかつとらん」とか（笑い）。ああいう先生おられたことは、われわれには怖かったですよ。

梅棹 批評眼というか、真贋鑑定術はたいしたものだった。敦煌文書の真贋も鑑定したし、論文の真贋鑑定も見事だった。わが人生で、ほんとうに印象の深い人のひとりです。

「白き神々の座」と「カラコルム」

栗田 少し話を前に進めますと、日本山岳会のマナスル遠征は 1953 年ですかね。

梅棹 最初が 1953 年²⁾。登頂はもっとあと（1956 年）です。

— 1953 年にマナスル登山があり、その記録が映画として上映され（注 1 参照）、テレビ放送もこの年に始まっています。ですから、1953 年あたりが映像メディアと探検の黄金時代の始まりという感じです。

梅棹 そうかもしれない。マナスル攻撃が始まってから、当然のようにして映画を作って、記録映画として一般に公開されました。大ヒットした『カラコルム』は 1956 年です³⁾。探検は、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊が正式名称です。

栗田 これに映画班を連れていこうというアイデアは、どのようにして出てきたのですか。

梅棹 映画班を連れていこうというのは、だれが言い出したのかな。日映新社を連れていくことは、当然のように決まっていた。

栗田 総隊長の木原均先生に、そのようなお考えがあったのですか。

梅棹 あったと思う。初めてのカラー映画です。被写体も派手な色彩のものでないといけない。ある百貨店が協力してくれて、各種デザインの生地をだしてくれた。隊員全員が、いろいろな柄の派手なシャツを新調して着ていった。テントも映画に映るということで、非常にきれいな色のテントやったな。

私は、撮影に行く前にシナリオを書いた。どんな所に行くかわからない、何が出てくるかわからないでしょう。しかし、シナリオがないと映画が撮れないので、シナリオを書いてくれと映画会社が言う。それで私が書いた。むちゃくちゃや（笑い）。出てくるであろう場面を想定しながら…。そのシナリオは残っているはずですよ。

栗田 ああ映画を見るまで、私はアフガニスタンというのは砂漠の国だと思っていたのですが、意外に緑があるということがわかりました。

梅棹 ああのとかわれわれは無知で、アフガニスタンの人はどんな服装をしているのかも、全然わからなかった。

栗田 「私は映画製作者」（梅棹 1992）という、先生の著作がありますね？

梅棹 ある。このカラコラム・ヒンズークシで初めて映画製作というのをやらされた。

栗田 このときのカメラマンはだれですか。

梅棹 林田重男さん。彼がカラコラム班に入った。それから、中村誠二さんはヒンズークシ班に入った。中村さんは林田さんよりずっと若い。私らと一緒に最後まで歩いた人です。実に熱心なカメラマンでね。われわれが馬で行進しているときには行列を後ろから撮っていて、次にだーっと走って行って、今度は前から撮る。ずいぶん過酷な労働だなと思って感心していた。

— 林田さんと中村さんは一緒に行かれたと思っていたのですが、別行動だったのですね。

梅棹 全然別です。林田さんは、のち（1957年）に、大ヒット作の『南極大陸』を撮った。その前に撮った『黒部峡谷』（1957年）もすごかったな。大ベテランです。中村さんは若いうちに亡くなって、林田さんのほうがあとに残った。

栗田 黒部の映画はまだ残っています。梅棹先生はああとき、初めてヘリコプターに乗って映画に…

梅棹 そうです。黒四開発がまだ最初の段階だった。今の黒四ダムサイトに小屋ができたが、小屋まで行くには、後立山の針ノ木峠を越えないとならない。そこをヘリコプターで飛んだ。針ノ木岳の東面の絶壁を溪谷のほうへ垂直に上がっていく。目の前にずーっと壁があって、ちょっと不思議な体験でした。それで峡谷へ降りたのち、溪谷のなかをヘリコプターで南へ、黒部峡谷を棒沢、十字峡まで行った。

栗田 先生は、『クロヨン』という変型判の本を書かれていますね（梅棹ほか 1964）。

私はそれを読んで、いい経験をされている人がいるなと思って、うらやましがっていました。

梅棹 あんな経験させてもらったのは、ほんとうにめずらしいことやろうな。三高の同級生が関西電力の課長をやっていて、「いっしょに行こう」と誘ってくれた。ちょっと今では考えられない。

栗田 そうですよ、あのころにね。

また話がカラコルムのほうに戻りますけれども、中村さんという人が撮られた映画が一般に公開されて…

梅棹 いやいや、『カラコルム』には、林田さんと中村さんの両方の分が入っている。前半は林田さんです。8000メートル級の山が並んでいる場面をカラコルムの大氷河地帯で撮ったのは林田さんです。それから、モゴール族を探しに行つて、ヒンズークシの山の中でついにモゴール族の村を発見するところを撮ったのが中村さんです。

栗田 あのときは、テープレコーダーみたいな大きな機材を持っていかれましたね。

梅棹 デンスケという大きなオープンデッキの機械で、重たい。私はその係になって…

栗田 機械のハンドルをぐるぐる回しているのを、映画で見たことがありますよ。

梅棹 ああいう不自由なものでよくやっていた。そのとき初めて、われわれの仕事では録音をやらないといけないと思った。これは、映画とまた別の技術がある。

そのときは、モゴール族の村へ行つて、モンゴル語の片割れを記録するのが目的でした。モンゴル語の変形したやつをテープに取ったわけです。

栗田 インフォーマントと隊員が座り込んで話しているのを上から撮影したシーンは、今でも印象に残っています。

梅棹 デンスケというのは、ポータブルの録音機でした。そのほかに、針金みたいなもので録音する装置⁴⁾があったな。

栗田 それは、今使われているテープレコーダーの一つ前の段階の機材です。

梅棹 それが全然だめやった。高い機械やったけれども持って行って、これはあかんということになって、結局オープンリール式のテープを使った。

栗田 録音されたものは、まだ残っているのですか。

梅棹 どっかに残っているんじゃないか。

栗田 あのとき一緒に行かれたのは、山崎さんという…

梅棹 山崎忠さん。天理大学のモンゴル語の先生でした。モゴールでは彼がモンゴル

語の追跡をやって、その後、私と別れてからひとりでテヘランに行って、そこで死んだ。

栗田 本当に残念ですね。いい発見をしたすぐあとにね。

梅棹 そうですね。しかし、そのテープは解読できています。解読をやったのは、神戸外国語大の長田夏樹さんという、私とほぼ同年代の人です。私が張家口にいるとき、向かいの蒙古文化研究所にいた。

栗田 モゴール族と初めて会われたときに、相手がしゃべりだしたでしょう。そのときに、先生はすぐにモンゴル語だとわかったのですか。

梅棹 私はわかった。その言語はモンゴル語にかなり近かった。

栗田 モンゴルがこの地方に入ってきたのは、13世紀ぐらいでしょう。その言葉を600年も、よく保存したものですね。

梅棹 消滅寸前やな。だいぶ怪しくなっていた。だけど、たしかにいた。これはモンゴル語や、間違いないって。

栗田 モンゴルは、いろいろな地域に進出していたのですね。

梅棹 モンゴルは、あちこちに断片的にいましたよ。雲南にもいて、かなりの数のひとが出てきた。

栗田 韓国に行って話を聞いたら、韓国人が牛肉を食べるようになったのは、朝鮮半島にモンゴルが進出してきてからのことだそうです。殺生をきらい仏教徒だった人が牛を食べるといのは、かなり大きな影響を受けていたのですね。

南極探検には、先生がかかわられることはあまりなかったのですか。南極探検にも、先ほどの林田さんが同行したわけですね。たいへん大当たりした映画ですよ。

梅棹 そうです。日本から南極に観測隊を出すというニュースを、私はアンホイにいるとき携帯ラジオで聞いた。アフガニスタンのいなか町です。すごいと思ったな。1955年の話です。それから日本に帰ってきて、たちまち南極の話に巻き込まれた。私は1941年に、冬の樺太の氷原で犬ぞりを走らせて、テストをやったことがあったから。

(テープ交換。この間に、アフリカ学術調査隊にテレビ撮影班が同行したことと、別の映画撮影班が隊の調査地に無断で立ち入った「事件」のことが語られる。その経緯は、梅棹(1992: 172-179)に詳しい。)

放送メディアの問題点

— そういう経緯があって、研究とテレビは離れていくようになったと考えたらいいのでしょうか。梅棹先生の一件にかぎらず、これ以後、テレビが研究にかかわることは少なくなっていくのですが。

栗田 だけど民博ができたとき、先生は「君たちは『11PM (イレブンピーエム)⁵⁾』以外は何に出てもかまわん」と言われた。

梅棹 そうだったかな。

栗田 『11PM』というのは、刺激の強い番組だったから。飯田さんは知っていますか？

— 僕も見ていましたよ（笑い）。

栗田 だから、先生は学者がテレビに接近することを否定なさったわけではない。

梅棹 全然否定していません。「私はいやや」と言ったのです⁶⁾。私はかなわんけれども、館員が番組に出たいなら出たらいい。

栗田 学問を大衆に還元するというスタンスが、昔から梅棹先生にはあったということです。

いっぽうテレビ側についていうと、「秘境もの」がネタ切れになりつつあったのではないかと、という気がするのです。

梅棹 探検ものを作るテレビ側には、どうせわからないのだから何をこしらえてもいいという、甘い認識があったように思う。だから、われわれから言わせたら、とんでもないそをつくる。

— テレビ番組の放映というのはなかなか記録に残りにくくて、私もちゃんと調べきれていないところがあるのですが、万博の頃になると、万博資料収集団（EEM）の撮影なんかもあったのでしょうか。

梅棹 万博のEEMには、映画は連れていっていない。万博が開かれているようすが映画になっただけです⁷⁾。映像を収集するシステムというのは、なかなかないですね。劇場や放送で流したらおしまいですから。

— そうですね。今はアーカイブもあるけれども⁸⁾、全部の番組が入るわけではない。

梅棹 とにかく全部、流したらおしまい、消えてしまう、という頭があったんやな⁹⁾。テレビはそういうものだという認識があった。テレビはジャーナリズムにおける二流で、一流のジャーナリストはテレビにタッチしない。そういうふう

なっていたのではないか。

栗田 それから、映像人類学という学問分野を提唱されたとき、民族誌映画のレファレンスができないのは問題だと、先生はおっしゃった。大森康宏さんのような映像作家を評価するときに、最後は結局、大森さんの書いた論文や解説で評価される、それはおかしいではないかということを、先生が言われていたのを覚えています。今でもその問題はありますよね。

梅棹 レファレンスのシステムができていない。テレビというのは、結局、だましの世界やな。だましても、それがだましであることを証明できないし、糾弾することもできない。

栗田 ずっと今に至るまで、そのことは尾を引いていますね。

梅棹 尾を引いている。それに、発言を切って貼ったためにニュアンスが変わっても、それを発言者はチェックできない。これに対して、文字の世界は厳しい。文字の世界にくらべたら、音声や映像の世界というのは、本当にいいかげんなものです。われわれ思想人のかかわるべき世界とは違う、と思ったんです。アフリカでのテレビ撮影時に1カ月そばにいたから、そう思っているんだけどもね。

栗田 ということは、制作と編集がまったく他者にゆだねられてしまうというところに、問題がありますね。

梅棹 著者というものがなくなってしまう。今のパソコンなんかは、引用や要約ということがあるから、もっとひどい。パソコンの世界では、何が起きているのか全然わからない。

栗田 たとえば「〇〇族はなまけものだ、というようなことは言ってはいけない」という発言をしたときに、「と言ってはいけない」という文章を切ってしまうと、「〇〇族はなまけものだ」だけが残るわけですね。そういう意味では、われわれでもいまだにつき合いにくい。

梅棹 しかも、そういう改竄をやった人の責任が、どこへ行ってしまったかわからない。

栗田 ところがこのごろは、そういうことを見抜けないのは映像リテラシーがないのだ、という開き直りがあるのです。だから、おまえがテレビにだまされるのは、テレビの見方を知らないからだと言われる。テレビのうそを見抜けなかった方が悪いということになってしまふところがあるでしょう。そこに、テレビ関係者の開き直りが出てきていますね。

梅棹 出てきているらしいね。私は早くに放送の世界と縁を切って、本当によかったと思っています。1963年だと思う（注6参照）。アフリカのテレビ撮影では、ワン・クルの映画を作って納めるという契約があった。これが放映された。このとき私は、ぜんぶ責任を果たして、同時に「映画出演もやめた」と言った。それまで溜まっていたやつが、全部爆発した。映像の世界では、われわれ文筆人にはありえないような、不徳義なことが起こる。それまで私はどちらかという、映像の世界を学界側から擁護、援護したのに、これでは擁護できない。

栗田 先生の情報産業論（梅棹1988）も、まさしくそういう援護部隊としての発言でしょうね。

梅棹 そう。学界とジャーナリズムというのは、積年の反目関係にありましてね。そうではないということを、私は言っていた。学界人とジャーナリズムはお互いに連合を組まないといけなと思っていたのに、ジャーナリズム側から次々に裏切られてしまった。これではとても、連合軍にはならない。

— それはテレビだけではなくて、新聞などの活字についてもいえるのですか。

梅棹 程度の差があります。活字でもいろいろな差がある。だけど映像よりはよっぽどましです。今でも映画には、本当に不信感がある。

栗田 学界とジャーナリズム、あるいは映像の世界に関する今後のあり方について、先生にはお考えがありますか。たとえば、放送大学に未来があるかというような。

梅棹 あまりありません。放送大学は、本当に危険な存在だな（後出の栗田の発言を参照）。放送大学というのは、学界の信頼関係を崩壊させてしまうきっかけになるおそれがある。初めに心配したほどのことはないような気もするけれども、聞いてみたら、ずいぶんひどいことが起こっているという。

とにかく、印刷媒体と放送媒体とは歴然と違う。印刷媒体のジャーナリズムも、かなりルールが甘いと考えて間違いないのではないか。私ははじめ、とにかく、ジャーナリズムとアカデミズムは連合軍だと思ったんだがね。思想によって立つ人間として、共同防衛せねばならん。ずっと、そういう主張をしてきた。

栗田 その関係というのは、当然、再構築しないといけないわけですね。

梅棹 再構築しないといけないと思いますよ。しかし、それがどこから壊れるかというと、つねに、ジャーナリズム側からたたき壊してくる。

栗田 おそろしいのは、テレビ媒体の影響力ですよね。全国ネットの視聴率1パーセントは、100万世帯に当たると言われています。だから、その巨大な影響力に対して、学者がどういう関係をたもつか。結局、必要なのは、クオリティー・チェックですよね。

梅棹 チェックだ。学界が、広い意味でのジャーナリズムをどういうぐあいに利用できるのか。映像中のできごとに関しては、事実がもうひとつよくわからないからねえ…。

栗田 それがまさしく、これからの教育の問題にも深く結びついてくると思うのです。

梅棹 そうです。だいたい、教育にそういうジャーナリズムが使えるのかどうか。簡単に言ったら、真実性の問題だ。つまり、論証できるという可能性をどこまで保証するか。これはうそである、ということが言えるよう、批判に開かれていなければならない。結果主義ではない。結果がおもしろいならすべてよし、というわけにはいかない。

— 私にもいい案があるわけではないのですが、民博は研究者とそれ以外の来館者との接点ですから、ここを拠点にしてジャーナリズムに働きかけることも可能かと感じているのですが。先生のお考えはいかがですか。

梅棹 具体的にどういうことだ。

— 研究者が、活字でなく映像をもっと積極的に利用していくことの可能性を、私は考えています。民博でビデオテーク番組をすでに作っていますけれども、来館者以外の人をもっと利用できるよう、学術映像を公開して、テレビとの違いを積極的に示すような試みが必要だと思うのです。

梅棹 可能性はあると思う。映像が本当かどうかを証明できる論証可能性があるなら。

栗田 放送大学ができたとき、その当時大学にあった教養部の科目を放送大学の番組で補填しようと、全国の大学では期待したのです。しかしもしそうすると、たったひとつの見方を、全国の学生が見てしまう。A先生の人類学概論が、それがひとつのスタンダードになってしまうわけです。有名な話ですが、アメリカのプエブロ・インディアンという民族を、ルース・ベネディクトは「中庸を重んじる民族だ」としたのに対して、リーは、「家父長権の強いディオニソス型の典型的な人びとだ」という見解を示しました。放送大学がひとつの情報を流してしまえば、こういう二つのものを見る機会がなくなって、対抗する情報が

消えてしまうのではないか、という恐れがあります。

梅棹 結局それだ。本当に真実なのかどうか、別の見方とくらべる余地を残しておくことが必要だ。ジャーナリズムとアカデミズムというのは、緊張関係がいまだに続いているな。

栗田 その緊張関係をなくした瞬間に、お互いにだめになる、ということですね。

梅棹 だめになるな。やる気になれば、いくらでも、だましの報道を作ることができる。ジャーナリズム、とくにテレビ関係の人では、その認識が甘いな。

栗田 甘いですね。結局、とくに民放のジャーナリストというのは、新聞ジャーナリストとくらべて認識が甘いですね。テレビ・ジャーナリストに見識のある人がもっと出てきてくれたらね。

梅棹 そうですよ。私はずいぶん民放に肩入れしていたんですが。

栗田 番組審議会というのは本当に形式的ですからね、形骸化していますね。

梅棹 私はいまだにつき合っています。映像ではないけれども、番組審議会ですとつ、まだ委員をやっているのがあります。

栗田 ああ、そうなんですか。あんまり悪口言えない(笑い)。

まとめ

— 今日、将来に対する先生の見通しも聞かせていただきましたし、参考になりました。昔の話については、たぶん、わからないことがあとから出てくると思うので、いくつかたまたま、またお時間取らせていただきたいと思います。

梅棹 はい。将来どうなるのか、結論的なことはわかりません。どこまでどうしたらいいのやら、全然わからない。

— 映像の作り手も、昔は「これがわれわれの撮影した所です」と独占的に放映して、視聴者がそれを信じて問題も少なかったわけですが、今は、携帯電話はあるわコンピューターはあるわで、映像とそれにくっついたテキストがうわさ話みたいに流れている。撮影地の実情に関して何が本当なのかわからない、というところがあります。そういう状況で、われわれ研究者も何とかしてスタンダードを示しながら関わっていけないか、と思っているところです。もっとも、スタンダードに関しては、さっきおっしゃったような(放送大学のような)問題がありますけれども。

梅棹 学問の世界でも、何が真実かよくわからないことが、かなりあります。

栗田 社会の出来事に対しても、人々がいろいろな目でいろいろなことを語れば、だ

いたいの像が結ばれてくるのですけれども、テレビはあまりに影響力が強すぎて、撮影した人の勝手な判断が独り歩きしてしまうおそろしさがあります。1パーセントが100万家庭というようなメディアは、今後、影響力を下げていかなければいけないと思います。媒体がたくさんできたほうがいいと思います。

— デジタル放送になったらチャンネル増えるから、影響力が低下するという話もありますけれども、私はわかりません。

栗田 それともうひとつ、映像マスメディアの生まれたときからの欠陥として、レファレンスができない。作り手は作品を放映するだけでなく、博物館か情報館に収めて、だれでもそれを批判できるようにしておかないといけないでしょう。

梅棹 レファレンスができないというのは致命的やな。

栗田 落語家の落語と同じで、聞きっぱなしになるのです。だから、「そう言った」「言わなかった」ということになって、どうしようもない。

梅棹 聞いておもしろかったら、おしまいにしてもいいのだけれども、そうすると、学問のように真実かどうか問題になる世界では、通用しない。

栗田 最近、ドキュメンテーションセンターを作る動きがあるようです。あれだけお金をかけて番組を作っているのですから、少なくともドキュメンタリーものは、そうしたセンターに保管しようというのです。後世に耐えられるものがあるかどうか知りませんが。NHKはもう作っている（注8参照）。

梅棹 マスコミの問題に関しては、私もまだ、はっきりわからないことがたくさんあります。けっして、反マスコミ論者ではありません。おおいに協力したいし、相手も協力を必要としているけれども、あまりにも問題が多い。

— でも先生は「テレビやめた」のときに、新聞記事で御意見を発表していらっしゃるんですよね。今の先生方はそういう機会があまりないから、学問とマスコミの緊張関係もだんだん見えなくなっているのではないですか。

梅棹 そうかもしれんな。

栗田 逆に、世間では、テレビに出てくる先生を偉い先生だと誤解するのです。たとえば北朝鮮のことに関しても、テレビに出て解説する人は一流だと見なされますが、韓国・朝鮮文化の専門家に聞いてみると、中にはジャーナリストだった人も多いようですね。現地の言葉や文化から勉強している先生は一部だけで、ほかの人は、新聞社のソウル支局長だったとかね（笑い）。そういう人がみんな、退職後、先生をしている。学問の世界のトレーニングを受けた人ではないのに、それがひとつのオーソリティーになる。

- 梅棹** テレビのほうにも、「出してやる」という意識がある。新聞も、「こんなことやったら書かせてやらないぞ」って、露骨に言うのを聞いたことがあります。
- 栗田** 岩波書店から本を出すと、この研究者は一流だと認識される。梅棹先生も、岩波文化人として登録されているということですね。
- 梅棹** そういうことでしょうかねえ（笑い）。

注

- 1) 正しくは、二度めの遠征時。1952年の予備的踏査に続いて、翌1953年に最初の登山隊が派遣されたが、映画は主に1954年の遠征を記録している。横有恒を隊長として今西壽雄らが初登頂に成功したのは、1956年の三度めの遠征時。
- 2) 本隊の派遣は1953年が最初だが、その前年に、今西錦司らが踏査隊としてネパールを訪れている。
- 3) 探検隊の派遣は1955年で、その映画の劇場公開が1956年。
- 4) 銅線式磁気録音機（テレグラフォン）のこと。磁気テープのかわりにピアノ線を磁気化させて録音をおこなう。
- 5) 1965年から1990年まで、日本テレビ系列で午後11時から放映されていたワイドショー番組。サラリーマンの新しい娯楽をリードするとともに、大胆な性表現を多用したこと、深夜番組の定着化に寄与したことなど、テレビ文化の変貌をさきがけた（伊豫田ほか1998: 50）。
- 6) 梅棹は、1962年11月12日の朝日新聞の「私はテレビに出ない」という記事、および、1974年4月13日の毎日新聞の「反テレビ」という記事に、コメントを寄せている。
- 7) 劇場公開用につくられた映画としては、『公式長編記録映画 日本万国博』（製作＝社団法人ニュース映画製作者連盟、配給＝松竹／ダイニチ映配）がある。
- 8) 放送された番組を保管・公開するための施設としては、財団法人放送番組センターが運営する放送ライブラリー（横浜市中区）や、各地のNHK放送局に設置されている番組公開ライブラリーなどがある。
- 9) レファレンスができない放送を研究活動媒体と見なさないという梅棹の考え方は、『民博通信』の「館員刊行物一覧」についての記事に、明確に示されている（梅棹1978: 11-12）。

文 献

- 伊豫田康弘／上滝徹也／田村穰生／野田慶人／八木信忠／煤孫勇夫
1989 『テレビ史ハンドブック』東京：自由国民社。
- 梅棹忠夫
1984 「館員刊行物一覧の意義と方法」『民博通信』2, pp. 2-14。（この文章は、著作集のほか、『情報管理論』岩波書店、1990年などにも収録されている。）
1988 『情報の文明学』東京：中央公論社。
1992 『裏がえしの自伝』東京：講談社。
- 梅棹忠夫／冠松次郎／安川茂雄／足立巻一
1963 『クロヨン——北アルプス最後の秘境黒部に挑む世紀の大開発』東京：実業之日本社。